

中村真一郎著

色好みの構造

— 王朝文化の深層 —





中村真一郎著

色好みの構造

— 王朝文化の深層 —

岩波新書

319

中村真一郎

1918年東京に生まれる

作家・評論家

著書—「中村真一郎評論集成」(全5冊, 岩波書店)

「四季」(4部作, 新潮社)

「江戸漢詩」(岩波書店)

「対話集」(全4冊, 国書刊行会)

色好みの構造

岩波新書(黄版) 319

1985年11月20日 第1刷発行 ©

1985年12月20日 第2刷発行

定価 480 円

著 者 なか むら しん いち ろう
 中 村 真 一 郎

発 行 者 緑 川 亭

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株 式 岩 波 書 店
 会 社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・製本 法令印刷

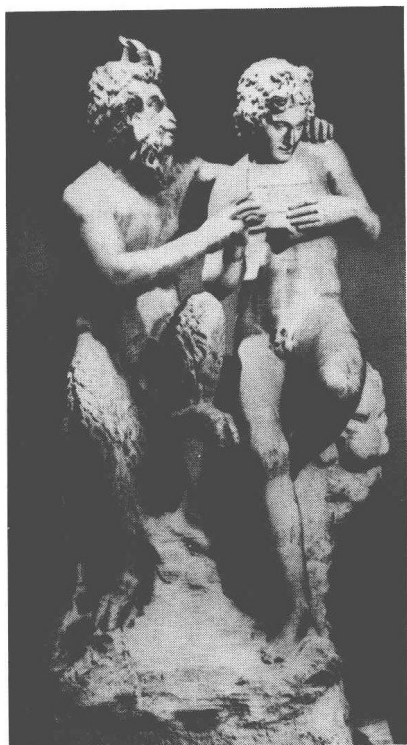
落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

序章	「愛の形」の諸文明での相違	1
第一章	「色好み」の文化的意味 ——「もののあはれ」論など——	7
第二章	前期・「色好み」の起原と原型 ——『竹取物語』と『伊勢物語』——	19
第三章	全盛期・王朝美学の理想人物たち ——『源氏物語』と『枕草子』——	55
第四章	「色好み」の思想的背景 ——『理趣経』と『医心方』——	107
第五章	後期・顔廃の影 ——源氏垂流物語など——	117

第六章	末期・王朝文化最後の輝き……………	139
	——『平家物語』と『右京大夫集』——	
第七章	解体期の一・観念への道……………	177
	——『新古今集』と『徒然草』——	
第八章	解体期の二・本能への道……………	191
	——『我身にたどる姫君』と『とはすがたり』——	
あとがき	……………	205

序章 「愛の形」の諸文明での相違



美少年とサテュロス(ローマ時代)

男女のあいだの愛、またその性的関係というものは、食欲とともに生理的な本能にもとづくものであるから、人類の発生以来、変らず続いている。

しかし、その愛なり性関係なりを、精神生活のなかにどう位置付けるか、また、その本能にどのような習慣の形を与えるか、ということは、時代により、また文明圏によって、驚くほど多様であり、相互に異っている。

たとえば、古代ギリシャにおいては、多くの都市国家が同性愛を法律をもって禁じていたにもかかわらず、プラトンの『パイドロス』に現れているように、男性同士の肉欲を伴う愛が美德であり、それは青年の人格形成のための行為であると同時に、戦場における強い愛国心の発揮のためにも必要であるとして奨励され、現に多くの壺絵などに、少年愛の性的交りの情景が多く描かれている。

また、女性同士の性愛にも、教育的意図があったことは、レスボス島の詩人サフォーとその女弟子たちの集りの例のように、広く行われていたのだろう。こちらはサフォー自身の詩や、「レスビアン」という近代語に、その強い痕跡を残している。

そして、ギリシャにおいては男女の通常的结合による夫婦愛というようなものは、プラトン

やサフォーのような強力な文化価値を生み出していない。

あるいはまた、イスラム社会においては、一夫多妻制が法制化されており、『千夜一夜物語』のハレムなどに、その古い実体が描かれているばかりでなく、二十世紀の今日においても、経済力のある男性は、公式に数人の妻を持っていることは、東南アジアの某国の前元首の例にも見られるように、一般的なものであって、一夫一婦という私たちの常識の方が、そちらでは非常識な例外なのである。

また、九世紀の有名なバグダッドの法律家神学者で、『花の書』を著わしたイブン・ダーウードは、「純潔な愛」の理論家であったが、彼の生涯の愛人は同性であり、アラブ世界でもまた、同性愛は精神的にも肉体的にも異性愛に匹敵していた。

それから、中世ヨーロッパの騎士道においては、騎士は自分の仕える主人の奥方に愛を捧げるのが常態であった。そして、その主人にとっては、自分の妻は愛の対象ではなく、財産の一種に過ぎなかった。私たちから見ると、まことに奇怪としか言いようがないが、十二世紀の神学者、ペトルス・ロンバルドゥスのごときは、「自分の妻を激しく愛するのは姦淫(adulter)である」とさえ、断言しており、当時の多くの領主の宮廷で開かれた、「愛の法廷」においても、騎士の貴婦人への憧れのなかに、愛の理想を見出していた。

つまりは、姦通のなかにしか、性愛は存在しないというのが、騎士道の習慣であった。

このようにして、異なる文明圏は、異なる「愛の形」を定着させて来た。そして、その文明が高度に発達し、洗煉の度が深まれば深まるほど、その「愛の形」は私たちの目から見て異様に感じられるようなものになる。

それでは、日本における「愛の形」は、私たちの常識にとって、納得がいくもので常にあつたか。日本人の人情なり気質なりは、ギリシヤ人やアラビア人や中世の西洋人とは異って、一貫して私たちの気持になじむものであったかと言うと、これがまたそうではない。

近代日本は明治維新によって、それ以前の江戸文明と断絶しているというのが、一応の通説であるが、近世のわが文明の爛熟期における、理想的な「愛の形」というものが、また現在の私たちにとっては、衝撃的なものである。

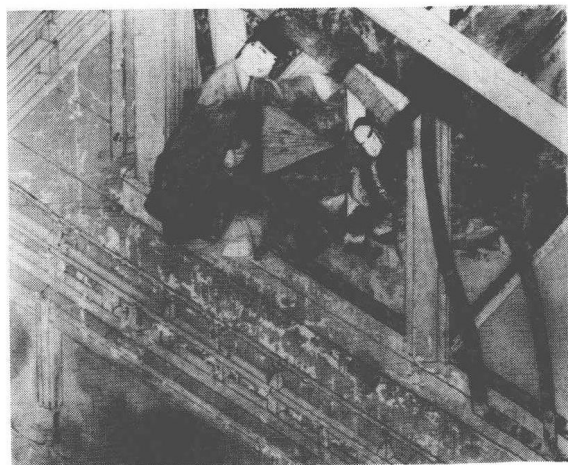
当時の人気者作家、「天保六家撰」のひとりの為永春水は、その代表的人情本『春色梅暦』において、主人公と二人の女性との三角関係を扱い、その終末は素人娘の方を主人公の妻とし、芸妓の方を妾として、女同士は姉妹のつき合いとなり、妻妾同居で一家繁盛という、「ハッピー・エンド」なのである。

そしてこの解決は、当時の社会の生んだ理想的紳士像、「通人^{つうじん}」の「粹^{じゆん}なはからい」というものであって、同時代の読者たちに、この結末が是認され、支持され、賞讃されたことは、この作品がベスト・セラーとなり、次つぎと続篇が書かれたことでも判るだろう。そして、その続篇のなかでは、さらに別の芸妓が、主人公の愛人として登場し、この女も別宅に妾となって収まることで、円満に解決する。

このような解決法を、今日の新聞の身上相談欄で、もし提案したとしたら、たちまち世論の一斉攻撃を受けることは必至であろう。しかし、わずか百五十年前の私たちの先祖は、異なる文明社会のなかで、このようなモラルのもとに生きていたのである。彼等の現代とは異なる価値観と美意識とは、このような、現代の道德観の絶対に容認し得ない「愛の形」を完成していたのである。

第一章 「色好み」の文化的意味

——「もののあはれ」論など——



「源氏物語絵巻」匂宮と宇治中君
(徳川黎明会蔵)

平安朝の 美意識

平安朝における「色好み」という「愛の形」、あるいは性的習慣も、今日から見ると、ほとんどファンタスティックとしか言いえないように、特異であり、非常識なものである。

そして、それは江戸時代とともに、わが国の文明が最も高度な感覚的洗煉に到達した平安朝の生んだ愛の理想であるが故に、その構造と、その觀念の変遷については、充分に考察が必要であろう。私は、その実体を、時代を追って、残されている歌や日記や隨筆や告白録や物語や史書やのなかに、辿ってみたいと思う。

かつて、大正の作家、佐藤春夫は、日本文学の背骨をなすものは歴代の勅撰集である、という卓見を叙べたが、私はさらにその考えを押し進めて、日本人の美意識は平安朝において完成した、それ以前は準備期であり、それ以後は、その解体期であるという見通しを持っている。そして江戸時代がその王朝美学の再興期であったことは、二つの両極端な建築物、桂離宮と日光東照宮とに現れているという、大まかな展望を従来から抱いている。

桂離宮は平安朝の美意識が中世を通じて、宮廷貴族階級とともに生命力を失いながら、下降し純粹化していった、その底辺の産物であり、東照宮は新しい武士階級による無邪気で猥雑な

生命力に溢れた、彼等の幻想のなかでの王朝の美の復興なのである。

従って、前者には室町の連歌師たちのなかで結晶した、「冷えさびた」氷の美と通ずるものがあり、後者には岩佐又兵衛の絵巻物などの持つ、当時の新興階級のなかの夢の王朝文化の過剰な豪華さ——大宮人の中庸感覚、「つきづきし」さからすれば、悪趣味でさえあるもの——を、感覚のうえで連想させる。そして両者とも、平安朝美学のヴァリエーションだ、というのが、私の以前の考えである。

この平安朝の美意識を頂点に置くという、私流の歴史観——それは、勿論、私自身の生涯をかけて選択した、私自身の人生観にもとづくものであって、多くの異なる人生観の読者をも、充分、予想した上での発言であるが——からすれば、その美意識と不可分の関係にある「色好み」という文明的理想も、日本の伝統の根にひそんでいて、今日でもその分解し、解体した形態が、観念生活のなかに残存しているかも知れない、と言うことになる。少くとも、近世の為永春水の三角関係に対する「粹」なはからの奥には、光源氏の六条院における妻妾同居の栄華の生活が、遠い反映として影を落しているのではなからうか。

本居宣長
の解釈

この「色好み」という平安朝の生んだ時代思潮にもとづく文明的理想に、時代を超越した普遍的価値を与えようとしたのが、江戸期の国学者、本居宣長であった。

彼はその著『玉の小櫛』において、「もののあはれ」という観念を提出することによって、『源氏物語』のなかに描かれた、恋愛を中心とする生活態度を擁護した。

宣長は、『源氏』を「誨淫ノ書」であるとする従来の批判を、それが儒教道德の「からごろ」による非難であって、日本人には当てはまらない、日本人の本来の心の美質は、そうした外国の道德的判断からは独立した、趣ふかい恋愛の諸相のなかに、「もののあはれ」という美しい開花を示すものだ、と主張した。

「人の情の感ずること、恋にまざるはなし」。従って、『源氏物語』のなかの人物に対する、作者自身の評価も、その人物のなかの恋の経験の深さの度合いによる。

そこで、儒教道德によれば「不義」を働いた筈の藤壺中宮の方が、道を踏み外さなかった弘徽殿太后よりも、作者によれば「よき人」ということになる。作者は故意に姦通や近親相姦を讃美しているのではない。しかし、そうした「わりなくあながちなすぢ」（無分別な無理な方向）には、「今一きはもののあはれのふかきことある故」に、それらが材料として採りあげられたのである。物語が「不義なる恋」を書いているのは、そうした濁って汚ない泥水を賞でい

るのでなく、その泥水のなかから蓮のように美しい「物のあはれの花」を咲かせるためである……

この宣長の『源氏』論は、王朝物語のすべてに適用できるだろう。彼はこの「もののあはれ」という、あらゆる道徳を超越した——というのは、姦通や近親相姦は、儒教道徳だけでなく、近代の市民道徳からもまた非難すべきものであるから——理念によって、平安朝人の「色好み」を、日本人の心の通時的な本性であると、主張したのである。

（反「色好み」
の少数派）

ところで、「色好み」、好色、というのは、今日の言葉としては、その人物の性格的欠点をさす。たとえば、もし首相が多数の女性と同時に交渉している実情が暴露されて報道され、「好色漢」であると非難されたら、その内閣はたちまち崩壊するだろう。近代の一夫一婦制社会においては、「色好み」は、隠しておきたい欠陥であって、「もののあはれ」を知る人であるという賞讃を、現実に期待するわけにはいかない。ところが、平安朝時代においては、それがひとつの文明的価値であったということとは、個人にとっては美德であり、いわば教養人の資格であった、ということである。

後世の、王朝美学の心酔者であった兼好法師が、いみじくも説破したように、「色好み」で

ない人は、「玉の杯、底なきがごとし」で、人格のうえで根本的に欠けるところがある、と見なされていたわけである。

従って、ただひとりの妻を守ろうとする男は、変人として非難されたり、無教養な人間として軽蔑されたりすることにもなった。

その最も有名な実例は、時の最高権力者、藤原道長の嫡男である権大納言頼通の場合である。彼は村上帝の孫娘を妻として、鍾愛していた。それがやがて政略的理由で、三条天皇の女二の宮を頼通に降嫁させる話が持ち上る。道長は独裁者らしく、その決定を頼通に向って有無を言わせず宣告すると、頼通は承知しながらも泣き出した。

その時、道長は「男が妻をひとりしか持たないということがあるものか」と、頼通を叱りつけた。

しかし、妻を悲しがらせることに耐えられなくて、頼通は遂に心痛のあまり発病し、道長が治療のために経を読ませようとすると、笑い出す。ついには母の倫子は、赤ん坊をあやすように、彼を抱いて時をすごすようになる。頼通は神経衰弱が昂じて、重症の幼時退行現象が発生したのである。

彼はひとりの妻を守ろうという、時代の習俗に反する行為に出ようとして、帝と父とに抵抗